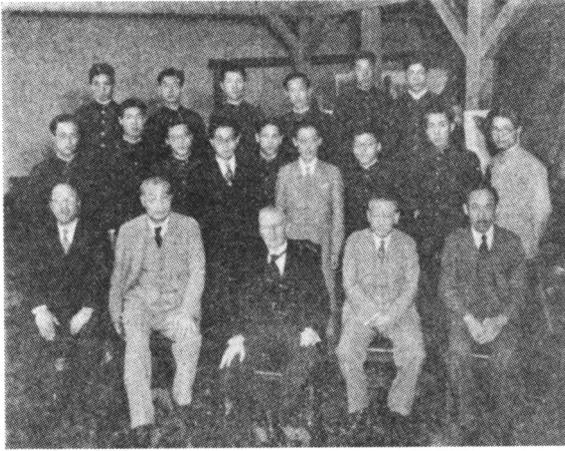


⑱ シュプランガー来校

昭和十二年十月一日、ドイツの哲学者・教育学者シュプランガー (Eduard Spranger: 1882~1963) が本校において講演した。『東京美術』第十二号には小塚新一郎訳の講演録「文化と国民性」と次の記事が掲載されている。

シュプランガー博士を迎へて

かねて日獨文化交流教授として來朝中であつた獨逸國の硯學、文化哲學の權威、エドウアルト・シュプランガー博士は、東京帝大初め全国各地の官私立諸大學及び諸學會に於て講演及び連續講



シュプランガー来校記念

前列左より多賀谷健吉、結城素明、シュプランガー、芝田徹心、松田義之

(『東京美術』第12号より転載)

義、演習をされてゐたが、その御多忙中にもかゝらず去る十月一日特に本校師範科の招聘に御承諾頂き親しく博士の御講演に接することが出来た。博士は午前十時頃より本校參觀、校長先生始め、結城「素明」、多賀谷「健吉」、其他諸先生の御案内、御説明に終始御氣嫌よく、殊に日本畫教室の制作、師範科の夏季課題の制作品蒐集品等に感嘆して居られた様に拜察された。午後一時より第一講義室に於て御講演、はじめに博士の愛弟子ドクトル小塚新一郎氏を博士の通譯並びに案内者として御借しされた事に付いて校長先生に御禮申され、次で「文化と國民性」の題名のもとに御講演をたまはつた。この講演内容は、岩波版「文化哲學の諸問題」にそのまま掲載され、文庫に寄贈されてゐる。

尙口繪の寫眞(挿図参照)は、シュプランガー博士と師範科三學年の記念撮影である。

⑲ 文化勲章制定

昭和十二年二月十一日に文化勲章が制定され、同年四月二十八日に長岡半太郎、本多光太郎、木村榮、佐佐木信綱、幸田露伴、岡田三郎助、藤島武二、竹内栖鳳、横山大観の九名が最初の受章者となつた。

⑳ 現代日本画名作展覧会

昭和十二年八月二日より同月七日まで東京で第七回世界教育會議が開催され、その期間に合わせて帝國教育會は東京府美術館で現代日本画名作展覧會を開催することになった。本校はこれに全面的に

協力し、書記北浦大介、下村英時、講師石沢正男らが同会から事務の依頼を受けて展覧会のために奔走した。その結果、多数の名作が
出陳され、これを記念して同年十二月には『現代日本画名作展覧会
図録』（東京美術学校編集、第七回世界教育会議事務局発行）が刊行され
た。本書には和文、英文目録と百七十一一点の作品図版が収録されて
おり、芝田徹心校長が序文を書いている。

㉑ 帝国芸術院設置・第一回新文展

昭和十二年六月二十三日、松田、平生改組による美術界の混乱に
終止符を打つため、帝国美術院官制に代わって帝国芸術院官制が公
布され、従来の官展は文部省美術展覧会（新文展）と改まり、秋に
はその第一回展が開催された。

帝国芸術院会員に選ばれたのは、美術四十六名（旧帝国美術院会
員全員）、文芸十五名、洋楽・雅楽・能楽・建築・書道各二名で、本
校に關係のある美術と書道の部門は次のとおりであった（傍線は本
校現職教官）。

岡田三郎助	中村 不折	結城 素明	和田 三造
和田 英作	藤島 武二	北村 西望	山崎 朝雲
川合 玉堂	荒木 十畝	菊池 契月	内藤 伸
竹内 栖鳳	小室 翠雲	建昌 大夢	西山 翠嶺
板谷 波山	松林 桂月	横山 大観	有島 生馬
香取 秀真	西村 五雲	梅原龍三郎	佐藤 朝山
鍋木 清方	朝倉 文夫	山下新太郎	斎藤 素巖
南 薫造	清水 南山	安田 鞞彦	平櫛 田中

第一回新文展の審査委員には上記帝国芸術院会員の外に左記の人
人が選ばれた（傍線本校現職教官）。

日本画（主任鍋木清方）

松岡 映丘	石井 柏亭	安井曾太郎	津田 信夫
中沢 弘光	橋本 関雪	前田 青邨	藤井 浩祐
五代 清水六兵衛	富本 憲吉	小杉 放庵	尾上 柴舟
川村 曼舟	川端 龍子	小林 古径	比田井天来
			（書道）

洋画（主任中沢弘光）

野田 九浦	川崎 小虎	矢沢 弦月	吉村 忠夫
中村 岳陵	堂本 印象	福田平八郎	宇田 荻邨
矢野 橋村			
小林 万吾	辻 永	中村 研一	斎藤 与里
田辺 至	鈴木千久馬	中野 和高	長谷川 昇
林 倭衛	伊原宇三郎	川島理一郎	
彫塑（主任 北村 西望）			
安藤 照	石井 鶴三	小倉右一郎	国方 林三
澤田 晴廣（政廣）	長谷川栄作	横江 嘉純	
美術工芸（主任 津田 信夫）			
高村 豊周	佐々木象堂	海野 清	六角 紫水
二代 堆朱	楊成	山鹿 清華	吉田源十郎
河村 蜻山		沼田 一雅	岩田 藤七